

令和4年度第1回立地適正化計画懇談会意見

(令和4年8月31日開催)

○資料1「立地適正化計画の改定（防災指針）」について

- ・意見は特になし。

○資料2-1「災害リスクの把握・分析と課題整理（都市レベル）」について

カテゴリ	内容
内容確認	・災害リスクを把握する地域は、立地適正化計画の居住誘導区域内をということか。
回答	・防災指針では、居住誘導区域内に存在する災害リスクに対する防災対策を検討していきます。
対策方針	・土砂災害に対しては、居住誘導区域からの除外を検討すると記載されている。現在、土砂災害のリスクがある区域にも居住者がいることや、岡崎市が多くの丘陵地を有しているという地域特性も考慮し、除外という記載のみでなく、土砂災害についても対策を検討するべきである。
回答	・今回は水災害を主とした資料となっているため、土砂災害のリスクがある区域に対する周知方法も検討し、防災対策を示します。 ・水災害を取り上げた理由としては、近年、線状降水帯等の大雨の災害が予想されていることに加えて、国土交通省が定めている立地適正化計画の手引きでは、水災害による影響に主眼を置いているためです。 ・水災害は基本的に発生予測が可能であり、避難のリードタイムの確保ができるため、特に居住誘導区域内の水災害のリスクについて、周知が必要と考えています。一方で、土砂災害は発生後、避難のリードタイムの確保が困難であるため、現在の居住者に対して、災害リスクを示していくことが必要と考えています。
分析方法	・他市町村の防災指針でも、分析の点数の重みづけは行っているのか。
回答	・それぞれの市町村の防災指針によって分析の配点や方法は異なります。今回の資料では、市民へのわかりやすい説明という観点で、各項目に該当する場合、1点の加点として評価を行っていますが、点数の重みづけによって特性を反映する方法も考えられるのではないかと思案しているところです。
分析方法	・浸水実績は、昔の矢作川や乙川が氾濫した実績は含んでいるのか。
回答	・浸水実績は、平成12年の東海豪雨と平成20年8月末豪雨で浸水したエリアを示したものであり、矢作川や乙川が氾濫した大昔まで遡った実績は示していません。なお、矢作川や乙川は、氾濫の実績ではなく、氾濫することを想定した区域を示しています。
分析方法	・岡崎市では、住みたい場所や利便性が高い場所の多くが、災害リスクが高い地域と重なっている。 ・ハード対策を実施できるのであれば、対策できるハザードに対する点数の重みを軽くしてもよいのではないかと。

回答	<ul style="list-style-type: none"> 意見を参考に、今後ハードを含めた対策について検討を進め、場合によっては点数付けを見直すことも検討します。
分析方法	<ul style="list-style-type: none"> 都市の生活利便性の評価項目に高齢者福祉施設を挙げているが、グループホーム等の障がい者関連施設についても追加を検討してほしい。併せて、特別養護老人ホームやケアハウス等の高齢者の入所系施設についても追加を検討してほしい。
回答	<ul style="list-style-type: none"> 現在の高齢者福祉施設は、立地適正化計画の都市機能増進施設に基づいて整理しています。提案のあった施設についても分析項目への追加を検討します。
分析方法	<ul style="list-style-type: none"> 計画規模や想定最大規模の災害は、100年や1000年に1度の確率で発生する災害であり、どちらも発生頻度が少ない災害であると言える。災害リスクと都市構造上の重要性の組み合わせによる分析と評価の項目を再検討してほしい。 他市町村の事例で、計画規模と想定最大規模の発生確率が異なる災害ハザードを重ね合わせて評価している事例は少なく、基本は各ハザードに対して対策を検討している。他市町村と同様に、計画規模と想定最大規模の2つの視点からアプローチした方がよいと考える。 浸水想定区域で示している発生頻度の低い災害に対しては、まずは避難等のソフト対策が基本となると考える。岡崎市は、居住誘導区域内の災害リスクに対する防災対策を検討する方針で進めてほしい。 都市構造上の重要度に関する点数の重みづけについて、人口密度80人/ha以上を対象としているが、居住誘導区域は人口密度40人/haが基準となるため、40人/haで都市構造の重要性の把握・分析を行うよう、見直してほしい。
回答	<ul style="list-style-type: none"> いただいた意見を参考に検討します。
分析方法	<ul style="list-style-type: none"> 災害リスクの重ね合わせで評価を行うか、個別に評価を行うか、どちらが正解ということはないが、どちらが市民にとってわかりやすいかという観点から、この懇談会でも検討ができればよい。
分析方法	<ul style="list-style-type: none"> 岡崎市は災害が想定されるエリアに既に多くの居住者がおり、居住誘導区域の割合も大きく、ハード整備には多大な費用を要することから、点数の重みづけによりハード整備が必要な地域の優先性を検討することは妥当と考える。 災害頻度の異なる災害リスクを同一に1点と評価する方法には、懸念がある。合計点数が同じでも、発生頻度が低い災害のみが重なっている場合や、発生頻度が高い災害のみが重なっている場合もあるものと考えられ、合計点と同じであるから同じように対策を講じるということにはならないのではないかと考える。対策の検討にあたっては、同じ点数であっても発生頻度等を踏まえた区別が必要と考える。 例えば、合計点が低いエリアで対策を避難のみとした場合に、地域の実情と異なる可能性もある。点数の積み上げによる評価結果と対策が1対1の対応とならないようにできればよいと考える。
回答	<ul style="list-style-type: none"> 災害リスクを重ねた場合、同じ点数であっても地域ごとに重なる災害が異なることは把握しています。地域の災害特性を考慮しながら対策の検討を進めます。

分析手法	<ul style="list-style-type: none"> ・地震災害について、発生場所や時間、規模が予測困難であるということは理解できるが、大規模地震に起因する液状化の被害を除いてもよいのかが気になる。風水害に特化するという方針であれば、地震災害は除いて整理することも考えられるが、発生確率の観点では、30年以内の発生確率が70%とされている南海トラフ地震は、水災害よりも発生頻度が高いとも捉えられるため、市民への説明の際には留意してほしい。
------	--

○資料2-2「災害リスクの把握・分析と課題整理（地域レベル）」について

カテゴリ	内容
分析結果と対策の関係	<ul style="list-style-type: none"> ・地域別災害リスクの分析結果で示す図面では、想定最大規模の浸水深を掲載しているのに対し、対策では矢作川のハード整備の推進について記載されているため、ハード整備では対応できない想定最大規模の災害と対策の内容が合っていないように感じる。 ・想定最大規模のように規模が大きく、発生確率の低い災害については、市民への説明の際に過度に不安を煽らないような留意が必要である。
回答	<ul style="list-style-type: none"> ・市民へのわかりやすさを意識した資料づくりを行っていきます。
説明方法	<ul style="list-style-type: none"> ・想定最大規模を念頭に置いた説明では、過度に不安を煽ることが懸念される一方で、災害リスクを正しく理解いただく必要もある。防災指針の策定を契機に、行政と市民が対話をしながら災害リスクへの理解を醸成できるとよいと考える。
分析結果と対策の関係	<ul style="list-style-type: none"> ・ハザードマップは堤防の破堤を想定して作成しているため、堤防整備によって、災害リスクがなくなるといった誤解を市民に与えないような説明が必要と考える。（整備により災害リスクは軽減されるが無くなるわけではない。）
回答	<ul style="list-style-type: none"> ・堤防の破堤等のシミュレーションの前提条件を説明し、誤解を招くことがないように注意して資料を作成します。
説明方法	<ul style="list-style-type: none"> ・市民の記憶に残っている東海豪雨や平成20年8月末豪雨の被害を再確認するような資料を示すことはできないか。これに併せて、矢作川の氾濫等の想定される災害について説明すると、理解がされやすいのではないかと考える。
回答	<ul style="list-style-type: none"> ・平成20年8月末豪雨の被害を踏まえて総合雨水対策計画を策定し、災害当時の降雨量があった場合でも床上浸水を防止する対策を進めているため、このことを踏まえた説明を行っていきます。
分析手法	<ul style="list-style-type: none"> ・災害リスクの分析で使用している洪水浸水想定区域等は、岡崎駅南の区画整理の嵩上げは考慮されているのか。
回答	<ul style="list-style-type: none"> ・今回示している洪水浸水想定区域は、嵩上げ前の状況を考慮したシミュレーション結果です。現在は宅盤が2m程度嵩上げされているため、異なる結果となる可能性があります。また、嵩上げ後のシミュレーションは現状では実施されていないため、嵩上げ前のものを使用しています。

<p>分析方法</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・平成 20 年8月末豪雨での増水を受けて、伊賀川の整備が行われたと思うが、今回の資料の浸水想定区域は、それらの整備を反映した結果となっているか。 ・対策が行われているのであれば、やはり岡崎市で特に注意が必要なのは矢作川や乙川ということになるのではないか。
<p>回答</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・計画規模の浸水想定区域は、100年に1度程度の規模の大雨を想定したのですが、伊賀川の整備は30年に1度程度の雨を想定したものですので、改修整備が行われたとしても氾濫が生じる可能性はあります。平成20年8月末豪雨の浸水実績は、内水による浸水が生じたことを示したのですが、この点については改修整備によって改善されているものと考えています。なお、資料で提示している浸水想定区域には、整備後の状況は反映されていません。
<p>計画範囲</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・対策として早期避難について記載されているが、矢作地域のように、避難場所・避難所が洪水時に開設されない地域があることは課題と考える。「土地利用の規制は行わないが、ソフト対策を講じ、早期避難を促す」ということを位置づけるまでが立地適正化計画の範疇である。その先の「どこへ避難するか」等については、防災部局が防災計画等に位置づける内容であり、避難完了までストーリーとして繋がるように庁内で連携を図ってほしい。

○資料3 「防災・減災対策の検討」について

カテゴリ	内容
対策の記述方法	<ul style="list-style-type: none"> ・既存の関連計画に施策が位置づけられている場合は、関連計画に任せるという認識でよいか。例えば、避難所に関する計画はどうなっているか。 ・立地適正化計画では、多くのソフト対策が位置づけられるものと想定するが、関連計画と連携し、その先が完結できるようにすることが重要と考える。
回答	<ul style="list-style-type: none"> ・既存の避難計画の一例としては、防災部局が矢作川避難計画を策定しています。矢作川が氾濫した場合、広範囲が浸水し、約 20 万人に影響が及ぶため、一斉に避難すると混乱が生じることとなり、こうしたことを踏まえ、要支援者から段階的に避難することを見据えた計画となっています。
対策の記述方法	<ul style="list-style-type: none"> ・計画規模や想定最大規模の洪水時に開設されない避難所があるが、短期的に実施できなくとも、長期的に実施すべき施策の方向性だけでも防災指針には記載すべきと考える。 ・国土交通省が公表している基本的な考え方の中では、防災まちづくり活動やリスクコミュニケーションを実施すること自体がソフト対策としているため、市民への説明もソフト対策となるので、わかりやすい資料を作成してほしい。
対策の記述方法	<ul style="list-style-type: none"> ・矢作川の氾濫のように、市民の半数以上の被災が想定される災害において、ハード対策は現実的には困難であり、避難を中心としたソフト対策に重きを置く必要があると考える。
回答	<ul style="list-style-type: none"> ・ハード対策では限界があるため、ソフト対策でできることも検討していきます。
対策の記述方法	<ul style="list-style-type: none"> ・ハード対策を講じるに越したことはないが限界がある。国・県と連携しながらハード対策を実施するとともに、ハード対策が困難な場合は、ソフト対策で住民へのリスクを周知することが重要だと思う。
対策の記述方法	<ul style="list-style-type: none"> ・福祉部局では、今年度からのモデル事業として、高齢者や障がい者等の災害弱者に対する個別避難計画を検討していると聞いている。また、福祉避難所の確保についても、知的障がい者等が通い慣れた施設へ避難ができる計画についても検討しているようだ。ソフト対策の充実が重要であるため、これらの内容についても加えてほしい。
対策	<ul style="list-style-type: none"> ・防災指針は令和5年度の3月末の策定予定となっているが、少しでも早く対策を講じられるようお願いしたい。
回答	<ul style="list-style-type: none"> ・関係課が所管する計画に基づいて既に進められている対策もあり、関係部局と連携を図りながら対策を進めていきます。
対策の記述方法	<ul style="list-style-type: none"> ・ハード対策として無電柱化が挙げられているが、浸水区域内で無電柱化を行うことは有効なのか。 ・矢作川周辺地域では、住宅を建てる際に1階はコンクリート造、2階以上が木造といったように、河川氾濫を想定した建築を行っている人もいる。新たに住宅を建築する人に対して、対策を紹介するだけでも効果があるのではないかと思う。

回答	<ul style="list-style-type: none"> ・対策は、水災害以外に地震災害に対する施策等も示しています。基本的に無電柱化の推進は、地震時を想定した対策として挙げていますが、地下に電線を入れる時点で浸水に対しても一定の対策は検討されていると考えます。
対策の記述方法	<ul style="list-style-type: none"> ・水災害以外の施策についても同列で整理しているため、わかりづらい。対策は災害ごとに区別して整理する等、わかりやすく整理してほしい。
対策の記述方法	<ul style="list-style-type: none"> ・防災減災という観点において、人命を守ることが最優先であることを記載してほしい。 ・生命を守るための施策、財産を守るための施策の視点で整理する等、市民にとってわかりやすい整理を検討してほしい。
回答	<ul style="list-style-type: none"> ・御意見を参考にわかりやすい整理を行い、記載していきます。
情報提供	<ul style="list-style-type: none"> ・国土交通省の概算要求等が公表されており、水管理・国土保全局の資料には気候変動や水災害リスク等、防災指針の検討に関連する情報が含まれているため、参考にしてほしい。